内省への取り組みが劣等感の対処的使用に及ぼす影響

○¹川端 脩子・²福森 崇貴

(¹徳島大学大学院総合科学教育部・²徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

キーワード：劣等感, 内省, 心理的成長

Effect of reflection on utilizing feelings of inferiority for mental development

Yuko KAWABATA¹ and Takaki FUKUMORI²

(¹ Faculty of Integrated Arts and Sciences, Univ. of Tokushima, ² Institute of Socio- Arts and Sciences, Univ. of Tokushima)

Key Words: feelings of inferiority, reflection, mental development

目 的

劣等感は一般的にネガティブな感情とされている。しかし、この感情は克服などポジティブな達成行動を引き起こす（山田・水野, 2011）ことも指摘されており、自己を成長に向ける機能を持つとも考えられる。

本研究では劣等感を、生かすことができれば成長への原動力となる感情と捉え、その対処的使用に着目する。ここで、水間（2003）では、内省傾向が高い者ほど否定的な自己を変容し成長しようとすることが指摘されており、劣等感を自己の成長につなげるためには、内省を行うことが必要と考えられる。

内省には、頻度、水準の深さ、自らの否定性直視の3側面があるとされている（佐藤・落合, 1995）。なかでも自己形成や人格発達文脈においては、自己の否定的な側面を直視できるか否かが重視されている（佐藤・落合, 1995; 水間, 2003）ことから、劣等感の対処的使用においても、この要因が特に重要となると考えられる。よって、否定性直視への抵抗が小さい者は、内省頻度が多い、あるいは内省水準が深いほど劣等感を対処的使用する傾向が高いと予想されるが、否定性直視への抵抗が大きい者は、頻度の多さ、あるいは水準の深さに関わらず劣等感を対処的使用する傾向が低いと予想される。以上より本研究では、上記仮説の検証を目的とする。

方 法

調査対象および手続き 4年制大学に通う大学生228名（男性108名、女性120名；平均年齢19.96歳±2.77歳）に対し、集団式による質問紙調査を行った。

質問紙構成 (1) 劣等感の程度：劣等感尺度（上野・上瀬・松井・福富, 1994）を用いた。3項目、3件法。(2) 劣等感の対処的使用：劣等感反応特性尺度のうち、（友尻, 2011）の劣等感への直接的な努力を測る「努力志向性」10項目、劣等感への補償的努力を測る「代償志向性」4項目を用いた。5件法。(3) 内省への取り組み：内省項目（佐藤・落合, 1995）を用いた。「内省頻度」、「内省水準」、「否定性直視への抵抗」の3下位尺度各5項目、5件法。

結果と考察

各変数間の相関分析

各変数間の相関分析を行った。結果をTable 1に示す。

内省への取り組みが劣等感の対処的使用に及ぼす影響

内省頻度、内省水準、否定性直視への抵抗およびそれらの交互作用が劣等感の対処的使用に及ぼす影響を検討するため、劣等感への対処的使用（直接的な努力、補償的努力）を目的変数とした階層的重回帰分析（強制投入法）を行った。まず、第1ステップで劣等感の程度を共変量として回帰式に投入した。続いて第2ステップで内省頻度、内省水準、否定性直視への抵抗を投入した。最後に、第3ステップで各内省変数の交互作用項を投入した。

その結果、直接的な努力に関しては、第2ステップにおいて、

Table 1 各変数間の相関係数

	2	3	4	5	6
1. 劣等感	.29**	-.25**	.15*	-.11	-.39**
2. 内省頻度		.48**	-.47**	.23**	-.26**
3. 内省水準			-.68**	.17*	-.04
4. 否定性直視への抵抗				-.11	.14*
5. 直接的な努力					.30**
6. 補償的努力					

* $p < .05$, ** $p < .01$

説明率の増分は有意となった（ $\Delta R^2 = .081$, $F(3, 223) = 6.603$, $p < .000$ ）。ここで、内省頻度の主効果が有意となり（ $\beta = .33$, $p < .000$ ）、内省頻度が高いほど直接的な努力をする傾向が高いことが示された。第3ステップにおいては、交互作用は有意ではなかった。

次に、補償的努力に関しては、第2ステップにおいて、説明率の増分が有意となった（ $\Delta R^2 = .042$, $F(3, 223) = 3.845$, $p = .010$ ）。ここで、否定性直視への抵抗の主効果が有意となり（ $\beta = .17$, $p = .044$ ）、否定性直視への抵抗が大きいほど補償的努力をする傾向が高いことが示された。また、第3ステップにおいて、説明率の増分が有意傾向となり（ $\Delta R^2 = .022$, $F(3, 220) = 2.093$, $p = .102$ ）、内省頻度と内省水準との交互作用が有意となった（ $\beta = -.20$, $p = .044$ ）。補償的努力を目的変数とする回帰方程式に、内省頻度、内省水準の平均得点±1標準偏差の値をそれぞれ代入したところ（Figure 1）、内省頻度が少なく内省水準が深い者が、最も補償的努力を行う傾向が高く、内省頻度が多く内省水準が深い者、内省頻度が少なく内省水準が浅い者が、補償的努力をする傾向が低いことが示された。

Figure 1 内省頻度と内省水準により予測される補償的努力の変化

以上より、本研究の仮説は支持されず、直接的な努力に関しては、内省に多くの回数をかけることが重要である一方、補償的努力では、少ない回数で自分を深く見つめるような内省の仕方が重要であることが示唆された。